

関東地方北東部における縄文時代中期前葉大木式系土器の縄文 —栃木県北部を中心として—

つか もと もろ や
塚 本 師 也

- | | |
|--------------------|-------------------|
| はじめに | 3. 各遺跡の中期前葉の土器の縄文 |
| 1. 栃木県北部の中期前葉の土器様相 | まとめ |
| 2. 観察の対象 | |

縄文時代中期前葉に関東地方北東部では、阿玉台式土器と大木式系土器が共伴する。大木式系土器は、原則として縄文を施文し、2段LRの縄の縦回転施文が主流と言われている。筆者は茨城県北部の大木式系土器に直前段反撚りの縄があることに気づいた。阿玉台式土器は、前半期は原則として縄文を用いないが、Ⅲ式新段階に縄文を施文するようになる。阿玉台式の縄文受容の背景を考える際、共存する関東地方北東部の大木式系土器の縄文と比較する必要がある。そこで本稿では、栃木県北部の3遺跡の中期前葉大木式系土器を観察し、縄文の種類や施文方向の傾向を把握することにした。2段LRの縄が主体を占め、1段Lの縄、2段LRとRLの縄(交互施文)、2段RLの縄が少量存在する。また僅かに、前々段反撚りや3段RLRの縄もある。ほとんどが縦回転施文であり、わずかに口辺部のみ横回転施文したものがあった。茨城県北部に見られた直前段反撚りの縄は、槻沢遺跡で1～2例確認されたにすぎなかった。三輪仲町遺跡や山苗代A遺跡では、2段LRの縄が約8割を占めた。槻沢遺跡では2段LRとRLで大きな差が無かった。

はじめに

縄文時代中期前～中葉、栃木・茨城両県の北部では、阿玉台式土器と大木式系土器が共存する。阿玉台式土器は、Ⅰa式からⅢ式の前段階まで、原則として縄文が施文されない。一方、同時期に共存する大木式系土器は、ほとんどの土器に縄文が施され、2段LRの縄が主体と言われている。

筆者は、関東地方北東部の中期縄文土器に、前々段反撚りの縄等を用いた特徴的な縄文が、一定量存在することに気づき、自身が執筆する事実記載文や実測図に表現してきた。ところが、中期縄文土器は2段LRやRLの縄による単節斜縄文が主体と考えられており、報告書等の記載にも反撚り等の特徴的な縄文原体が指摘されることは少ない。近年、茨城県北部の中期前～中葉の大木式系土器の縄文に、縄文の条に深淺差があるものや、全体として条が不揃いなものがあることに気づいた。このような縄文は、直前段多条もしくは直前段反撚りの縄を用いたものと考えられる。

阿玉台式土器はⅢ式新段階に縄文を施文するものが表れ、次のⅣ式では、ほとんどの土器に縄文が施されるようになる。阿玉台Ⅲ式の縄文が、大木式の縄文を受容したのか、別の由来があるのかを考える際⁽¹⁾、両者の縄文を比較・検討することになるが、前述の特殊な縄文は、こうした問題を解明する際の糸口となる。

これまで筆者が、栃木県北部の該期大木式系土器の縄文を観察した経験上、茨城県北部に見られた条の深淺差を持つものや不揃いなものは、あまり見られなかった。そこで、本稿では、栃木県北部の中期前葉大木式系土器の縄文を観察し、縄文原体の種類や施文方法等の特徴を把握することとしたい。そして今後は、八溝山地を隔てた茨城県北部の同時期の縄文を分析・比較して、その異同を明らかにしたい。

1. 栃木県北部の中期前葉の土器様相

筆者は昨年、栃木県北部の中期前～中葉の土器編年案を発表した(塚本 2019)。詳細は前稿に譲ることとするが、ここに概略を示す(第1図)。

阿玉台Ⅰa式期は、ほぼ阿玉台式で構成され、僅かに七郎内Ⅱ群土器等が伴う。阿玉台Ⅰb～Ⅱ式期も、阿玉台式が主体を占めるが、原体圧痕を施す土器、縄文地に隆帯や沈線で簡素な文様を施す土器及び七郎内Ⅱ群土器等の大木式系土器が少量伴う。続く阿玉台Ⅲ式古段階には、大木式系土器が増え、半数かそれ以上を占める。特に、七郎内Ⅱ群土器が爆発的に増える。阿玉台Ⅲ式新段階になると、阿玉台式の比率は少なくなり、七郎内Ⅱ群土器も存続するが、槻沢型、湯坂型、隆帯押捺型などが台頭し、火炎系土器も出現する。阿玉台Ⅳ式期には、大木式系土器の中で、槻沢型が安定的に存在し、七郎内Ⅱ群土器は低調になる。

2. 観察の対象

栃木県北部で、阿玉台Ⅰb～Ⅲ式土器と確実に共伴する大木式系土器で、縄文が施文されるものを観察対象とする。筆者は近年、縄文の有無によって、阿玉台Ⅲ式土器を新古に細分した(塚本 2013・2019)。阿玉台Ⅲ式古段階は、阿玉台Ⅱ式土器と共伴し、縄文が施されることはない。一方、阿玉台Ⅲ式新段階には、縄文施文された阿玉台Ⅲ式土器と施文されない阿玉台Ⅲ式土器の両者がある。阿玉台Ⅲ式土器、大木式系土器とも、1個体だけでは、阿玉台Ⅲ式古段階か新段階か判別できないものがある。そのため、今回は阿玉台Ⅲ式新段階までを観察対象とした。

3. 各遺跡の中期前葉の土器の縄文

(1) 品川台遺跡

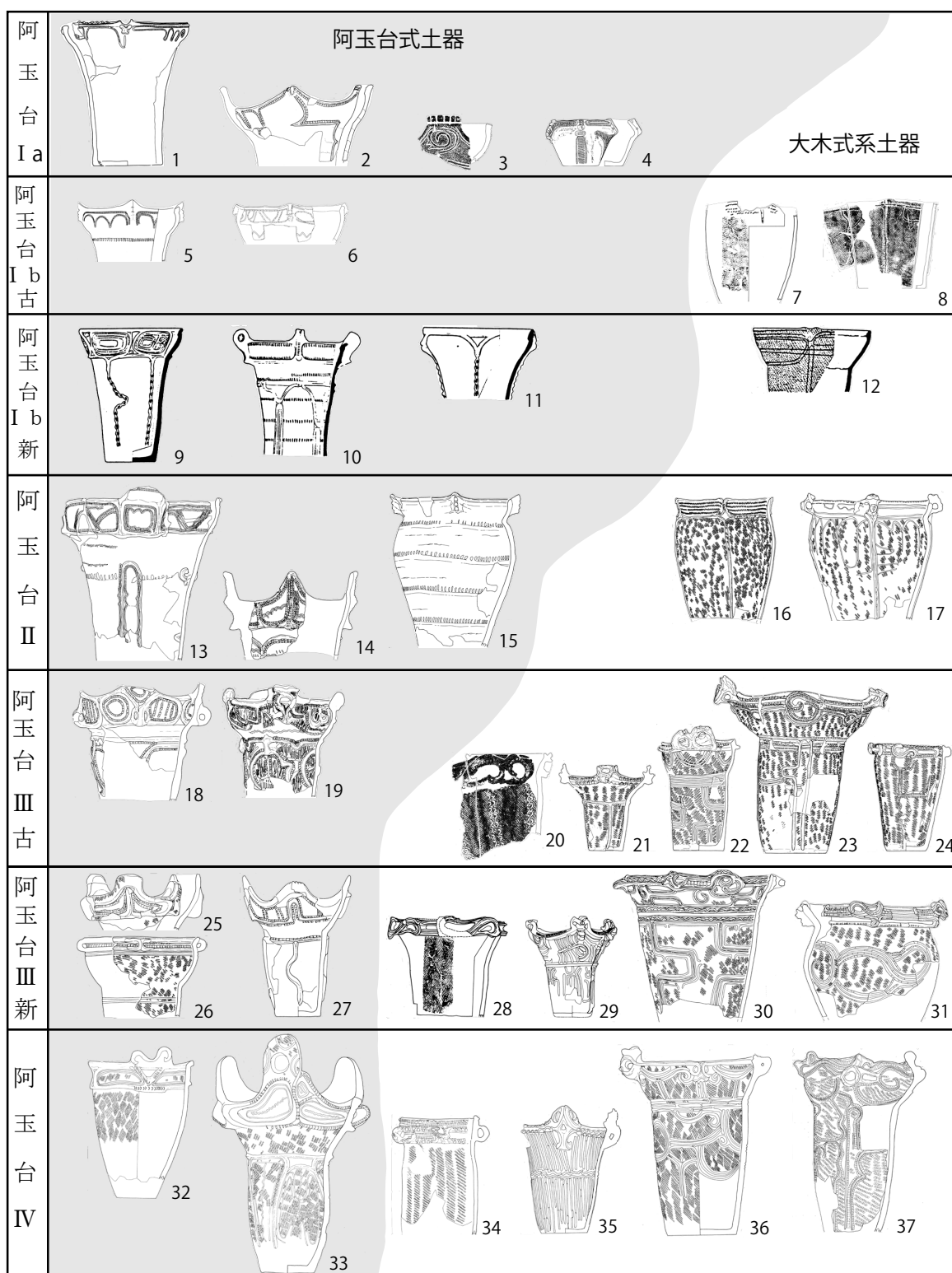
品川台遺跡は、栃木県大田原市蛭田(旧湯津上村)に所在する。那須野が原扇状地(台地)の扇端(南端)に当たり、箒川(那珂川の支流)左岸の河岸段丘上に立地する。昭和52(1977)年および平成元(1989)年に範囲確認調査が行われた。平成2～3(1990～1991)年には、工業団地造成に先立ち、財団法人栃木県文化振興事業団により記録保存のための発掘調査が実施され、報告書が刊行された(塚本 1992)。筆者は、この遺跡の調査および報告書作成を担当した。

調査した約7,000㎡の範囲に、阿玉台Ⅲ式古段階にほぼ限定される環状集落が存在した。9基の袋状土坑を取り囲む13基の居住施設(竪穴建物跡2棟、大形掘立柱建物跡1棟、炉を伴う柱穴群4基、炉が確認されなかった柱穴群6基)で構成された。

阿玉台Ⅱ式およびⅢ式土器と七郎内Ⅱ群土器を主体とする大木式系土器が出土した(第2図1～9)。出土した全破片を分析し、破片数における阿玉台式土器と大木式系土器の比率は4:7であった。また、大木式系土器の全てにおいて縄文原体の種類、施文方向を観察したところ、大半が2段LRの縄の縦回転施文で、少量2段RLの縦回転施文が存在し、その比率は8:1であった。そして僅かに横回転施文のものがあつた。

(2) 槻沢遺跡

槻沢遺跡は、栃木県那須塩原市槻沢(旧西那須野町)に所在する。那須野が原扇状地の扇央部にあたる。那須野が原扇状地には、北西から南東方向に細長い丘陵が存在するが、そのうちの「権現山丘陵」の北端部の平坦面、緩斜面上に立地する。大山史前学研究所による昭和8・10(1933・1935)年の調査、昭和27(1952)年の宇都宮大学郷土史研究班の調査および昭和52(1977)年の栃木県教育委員会による広域農道建設に伴う記録保存のための発掘調査が行われている(海老原 1980)。そして、平成3～5(1991～1993)年、広域農道建設に伴う記録保存のための発掘調査が、埋蔵文化財センターにより実施され、報告



1・4：仲内遺跡 2：坊山遺跡 3：何耕地遺跡 5・7：石関遺跡
 6・8：山苗代A遺跡 9～12：地蔵山遺跡 13～17・25～27・30・31：三輪仲町遺跡
 18・19・21～24・29・32～37：槻沢遺跡 20：小鍋内遺跡 28：湯坂遺跡

第1図 那須地方を中心とする中期前葉の土器編年

書が刊行されている(後藤 1996)。今回観察する土器は、この調査時に出土したものである。

学史的にも著名な槻沢遺跡は、中期前葉から後期前葉にかけての大規模集落遺跡で、中期から後期にかけての袋状土坑、中期後半の竪穴建物跡の複式炉等が注目されてきた。

今回は、阿玉台Ⅲ式古段階の SK393 から出土した土器(第 2 図 10～28)のうち、縄文が施文された 11 点の土器を取り上げる。SK393 出土土器は、筆者が阿玉台Ⅲ式古段階とした栃木県北部における標準的な一括遺物である。大木式系土器が多く、少量の阿玉台式土器が伴う。大木式系土器は七郎内Ⅱ群土器が主体を占める。報告書では、器形復原可能な土器として、阿玉台式土器 3 点、七郎内Ⅱ群土器 7 点、槻沢型 1 点、隆帯押捺型の土器 1 点、浅鉢と鉢(阿玉台式系) 5 点、無文深鉢 1 点、縄文が施文された体部 1 点である。

現在、那須野が原博物館に保管されており、今回 11 点中 9 点について実物を観察できた。

縄文原体の種類および施文方向は、第 1 表に示したとおりである。2 段 LR の縄が 5 点で 45.5% を占め、2 段 RL の縄が 4 点、両者を交互に施文するものが 1 点、直前段反撚り LLR が 1 点である。2 段 LR と RL の量比にあまり差がなかった。七郎内Ⅱ群土器に限定すると、2 段 LR が 4 点、2 段 RL が 1 点、両者を交互に施文するものが 1 点、直前段反撚り LLR が 1 点となる。七郎内Ⅱ土器では、2 段 LR 優勢の傾向を指摘できるが、品川台遺跡ほどではない。もっとも、破片全点を分析した品川台遺跡と袋状土坑出土の器形復原可能な土器のみを対象とした今回の分析を、対等に比較することはできない。なお、1 点の浅鉢形土器を除き、深鉢形土器の体部では、すべて縦回転施文であった。

筆者が茨城県北部の土器で注目した、反撚りによる条が不揃いな縄文(直前段反撚り LLR)を、栃木県那須地方で確認することができた。

(3) 三輪仲町遺跡

三輪仲町遺跡は、栃木県那須郡那珂川町(旧小川町)大字三輪に所在する。高原山麓から南東に伸びる喜連川丘陵は、東端を南流する那珂川に画され、那珂川と喜連川丘陵の間に、幅約 1.5km の南北に伸びる台地があり、三輪仲町遺跡はこの台地上にある。遺跡付近では、権津川(那珂川の支流)が、西北西から東南東に向かって流れ、遺跡はこの川が形成した支谷の南側に接する台地の縁辺に立地している。

過去に何度かの発掘調査が行われている。主立ったものとしては、昭和 62～平成元(1987～1989)年の財団法人栃木県文化振興事業団による国道 293 号バイパス建設に先立つ記録保存のための発掘調査(第 2 次調査)、昭和 63～平成元(1988～1989)年と平成 8 (1996)年の、小川町教育委員会によるバイパス建設によって孤立した農地の整備事業に先立つ記録保存のための発掘調査(第 3・4 次調査)がある。

遺跡は、旧石器、縄文、弥生、古墳、古代、中世の各時代に及ぶ。特に縄文時代中期前葉～後期前葉と古墳時代については集落規模が大きい。第 2 次調査では、縄文時代のものとして、竪穴建物跡 18 棟、土坑 498 基、埋甕 3 基、性格不明遺構 8 基を調査した。

今回は、第 2 次発掘調査(塚原 1994)の出土遺物のうち、阿玉台Ⅱ式期、Ⅲ式古・新段階の良好な一括遺物である SK136・159・186・208・212・280・300・436・528a・545 出土土器の縄文を観察・分析する。器形復原可能な土器と破片を合わせて 50 点を対象とした。2 段 LR の縄を縦回転施文したものが 39 点で、全体の 78.0% であった。この中には、口辺部のみ横回転施文したものもある。他に、1 段 L の縄を縦回転施文したものが 3 点、2 段 LR と RL を交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが 2 点、2 段 RL の縄を縦回転施文したものが 3 点、3 段 RLR の縄を縦回転施文したものが 3 点ある。

時期(細別型式)別にみると、阿玉台Ⅱ式期では、12 点中、2 段 LR の縄を縦回転施文したものが 11 点で 91.6% を占め、1 段 L の縄を縦回転施文したものが 1 点である。阿玉台Ⅲ式古段階は、5 点中 2 段 LR の縄を縦回転施文したものが 3 点で 60.0% を占め、1 段 L の縄を縦回転施文したものが 1 点、2 段 LR と RL の縄を交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが 1 点である。阿玉台Ⅲ式新段階では、24 点中 2 段 LR の縄を縦回転施文したものが 17 点で 70.8% を占め、1 段 L の縄を縦回転施文したものが 1 点、2

第1表 槻沢遺跡 SK393出土土器 縄文施文観察表

挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体	施文方向等	実見
2	10	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	縦回転間隔施文	○
2	11	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	12	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR・RL	交互に縦回転間隔施文	
2	13	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	直前段反撚LLR	縦回転間隔施文	○
2	14	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	15	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR ※直前段反撚りLLRもしくは直前段4条LRの可能性あり。	縦回転間隔施文	○
2	16	SK393	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	17	SK393	槻沢型	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	縦回転施文	○
2	18	SK393	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式古	2段LR	縦回転間隔施文	○
2	19	SK393	縄文のみの体部	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	縦回転施文	○
2	20	SK393	縄文施文浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	2段RL	横回転施文	
2	21	SK393	阿玉台Ⅲ式古段階	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	22	SK393	阿玉台式	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	23	SK393	阿玉台Ⅲ式古段階	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	24	SK393	無文深鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	25	SK393	阿玉台式浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	26	SK393	阿玉台式浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	27	SK393	阿玉台式浅鉢	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—
2	28	SK393	無文鉢形土器	阿玉台Ⅲ式古	—	—	—

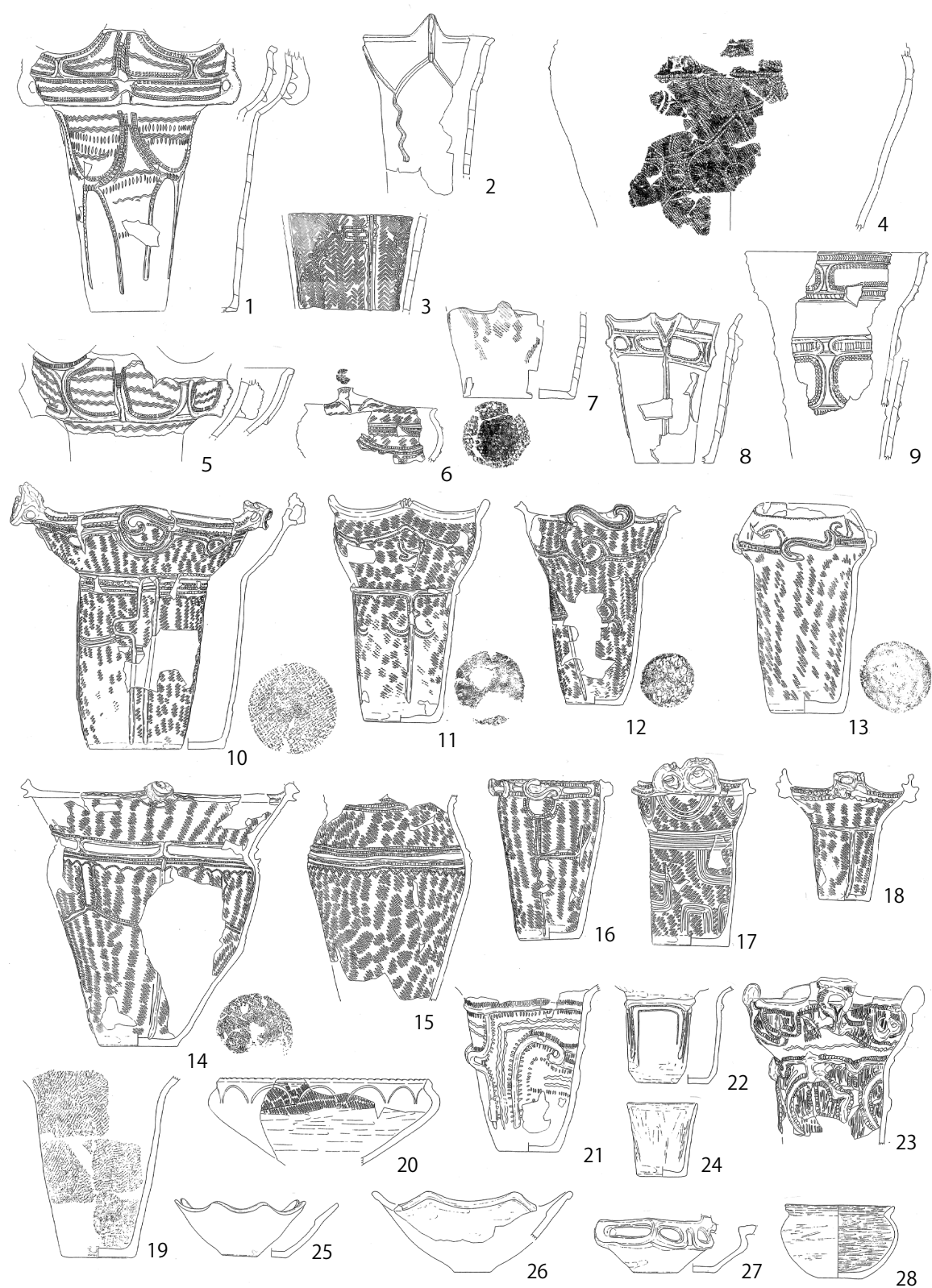
段 RL の縄を縦回転施文したものが3点、3段 RLR の縄を縦回転施文したものが3点である。新古に分けず阿玉台Ⅲ式全体では、37点中、2段 LR の縄を縦回転施文したものが27点で73.0%を占め、1段 L の縄を縦回転施文したものが2点、2段 RL の縄を縦回転施文したものが2点、2段 LR と RL の縄を交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが3点、3段 RLR の縄を縦回転施文したものが3点である。時期を問わず、七郎内Ⅱ群土器に限定すると、23点中2段 LR の縄の縦回転施文が18点で78.2%を占め、1段 L の縄の縦回転施文が1点、2段 LR と RL の縄を交互に縦回転施文した条が綾杉状を呈すものが1点、3段 RLR の縄の縦回転施文が3点である。

三輪仲町遺跡の中期前葉の全体的傾向として、2段 LR の縄を縦回転施文したものが8割前後を占め、他に1段 L、2段 RL、2段 LR と RL、3段 RLR の縄を縦回転施文してものがみられる。

(4) 山苗代A遺跡

山苗代A遺跡は、栃木県矢板市山苗代字堂山に所在する。高原山から南東方向に伸びる喜連川丘陵にある。喜連川丘陵は、北東を箒川に画され、南西から南部を荒川(いずれも那珂川の支流)が東南流し、中央部を内川(荒川の支流)が南東流する。内川とその支流により北西—南東方向の支谷が形成されている。この支谷に直交するように、小さな谷が多数存在し、全体が羊歯の葉を広げたような複雑な地形を呈している。遺跡は、小さな谷に挟まれた舌状台地上に立地する。

平成5(1993)年、工業団地造成事業に先立ち、造成地内約2,000㎡に対し、財団法人栃木県文化振

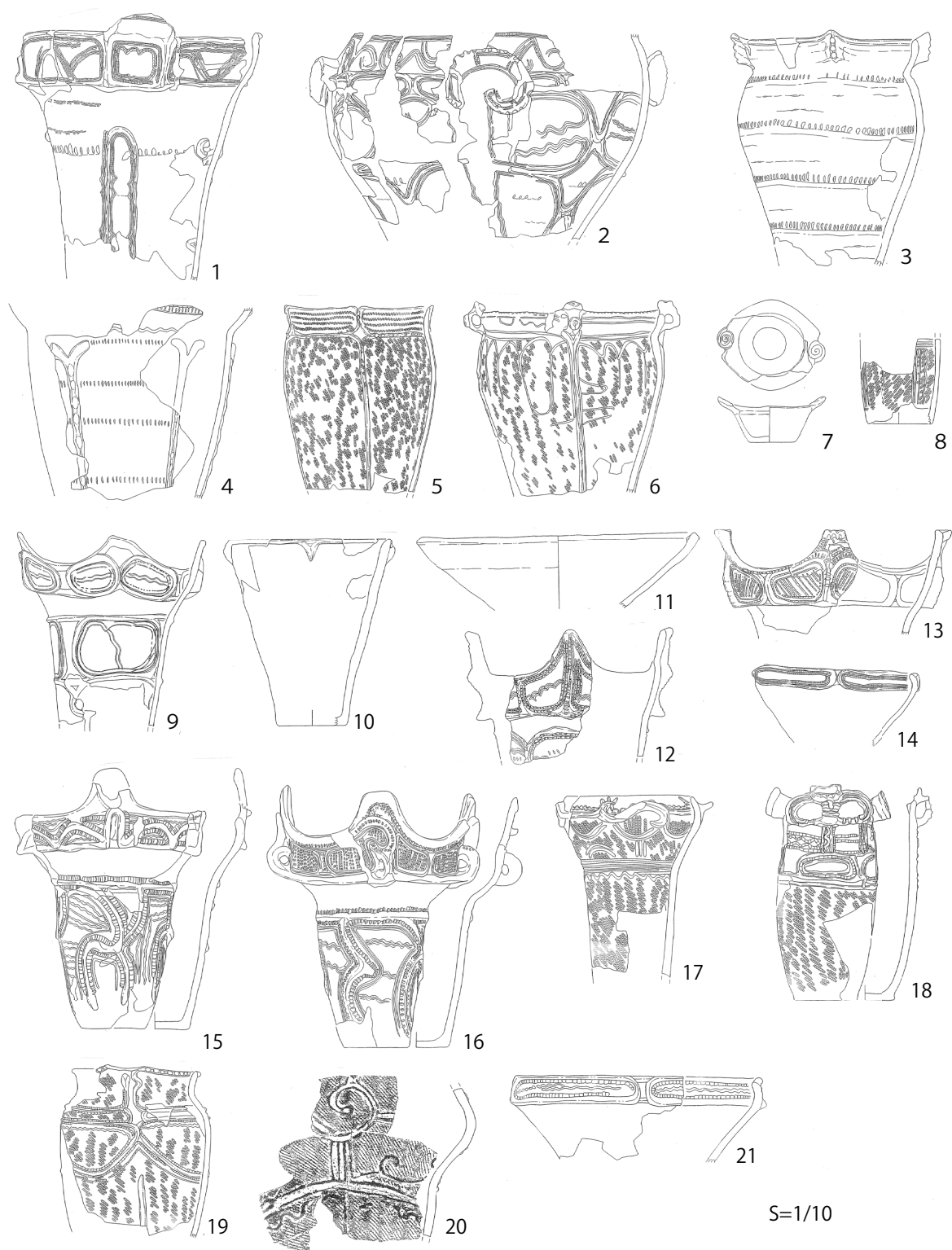


S=1/10

1～9：品川台遺跡

10～28：槻沢遺跡 SK393

第2図 品川台遺跡・槻沢遺跡 中期前葉の縄文土器



S=1/10

1～8 : SK136 9～11 : SK159 12～14 : SK545 15～19 : SK280 20・21 : SK208

第3図 三輪仲町遺跡 中期前葉一括遺物（1）



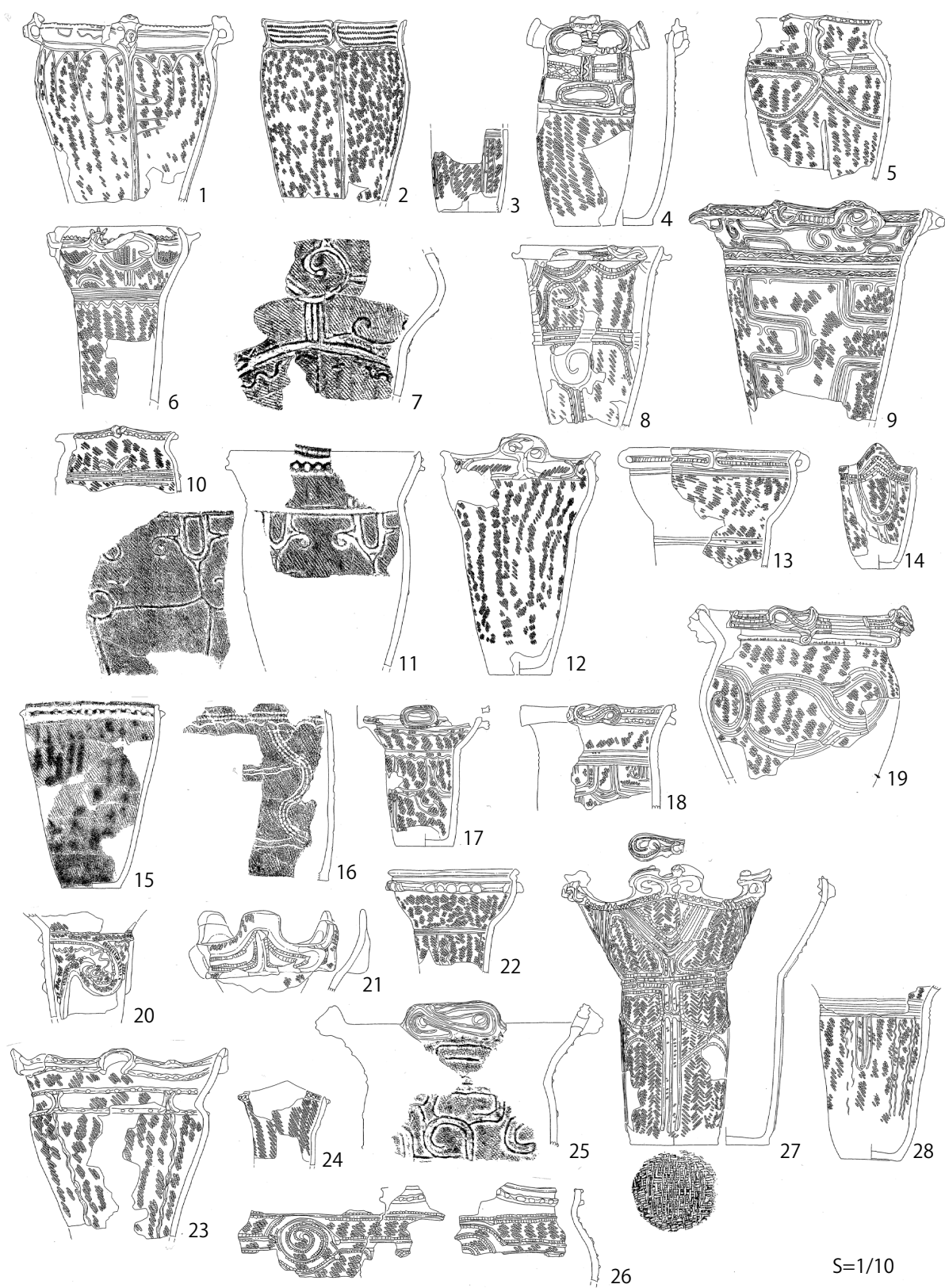
S=1/10

1～10 : SK212 11～14 : SK436 15～21 : SK528a
22・23 : SK300 24・25 : SK186 26・27 : SK533a

第4図 三輪仲町遺跡 中期前葉 一括遺物(2)

第2表 三輪仲町遺跡出土土器 縄文施文観察表 (1)

挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体・施文方向等	実見
5	1	SK136	縄文地に隆帯・沈線	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	2	SK136	原体圧痕	阿玉台Ⅱ式	2段LRの押捺、2段LRの縦回転間隔施文	○
5	3	SK136	縄文地沈線	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転間隔施文 ※加曽利EⅠ式期の混在の可能性あり	○
5	4	SK280	大木式系	阿玉台Ⅲ式古	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	5	SK280	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式古	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	6	SK280	槻沢型	阿玉台Ⅲ式古	2段LRの縦回転間隔施文（条の深浅差がみられるが、撚り戻し、多条かどうかは判別できなかった。）	○
5	7	SK208	縄文地隆帯	阿玉台Ⅲ式古	1段Lの縦回転施文	○
5	8	SK212	槻沢型？	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	9	SK212	槻沢型	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	
5	10	SK212	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	11	SK212	坪井上型	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	12	SK212	縄文地隆帯	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転間隔施文。口縁部は横回転施文。	○
5	13	SK212	阿玉台Ⅲ式土器（大木式とのキメラ）	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	14	SK212	阿玉台Ⅲ式土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	
5	15	SK436	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式新	1段Lの縦回転間隔施文（多条ではなく、2条撚りであることを確認）	○
5	16	SK436	縄文地に条線	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
5	17	SK528 a	坪井上型	阿玉台Ⅲ式新	2段RLの縦回転間隔施文	
5	18	SK528 a	坪井上型	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文（摩耗していた。）	○
5	19	SK528 a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段RLの縦回転間隔施文	
5	20	SK528 a	阿玉台Ⅲ式土器	阿玉台Ⅲ式新	2段RLの縦・横回転施文（節が細く、細い節と太い節が交互に繰り返す。施文幅せ狭く、節が何条おきに繰り返すか把握できなかった。0段多条、前々段反撚りの可能性も否定できない。）	○
5	21	SK528 a	阿玉台Ⅲ式土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	
5	22	SK528 a	阿玉台式と大木式のキメラ	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転間隔施文	
5	23	SK300	縄文地に隆帯	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	24	SK300	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	25	SK533a	中空突起+隆帯	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文（硬く粗い繊維で撚ってあるため、単節か無節か区別が困難であった。）	○
5	26	SK533a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文	○
5	27	SK186	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRとRLを交互に縦回線施文	○
5	28	SK186	縄文地に沈線	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転間隔施文 ※加曽利EⅠ式期の混在の可能性あり	○



第5図 三輪仲町遺跡 中期前葉縄文施文土器(1)

第3表 三輪仲町遺跡出土土器 縄文施文観察表 (2)

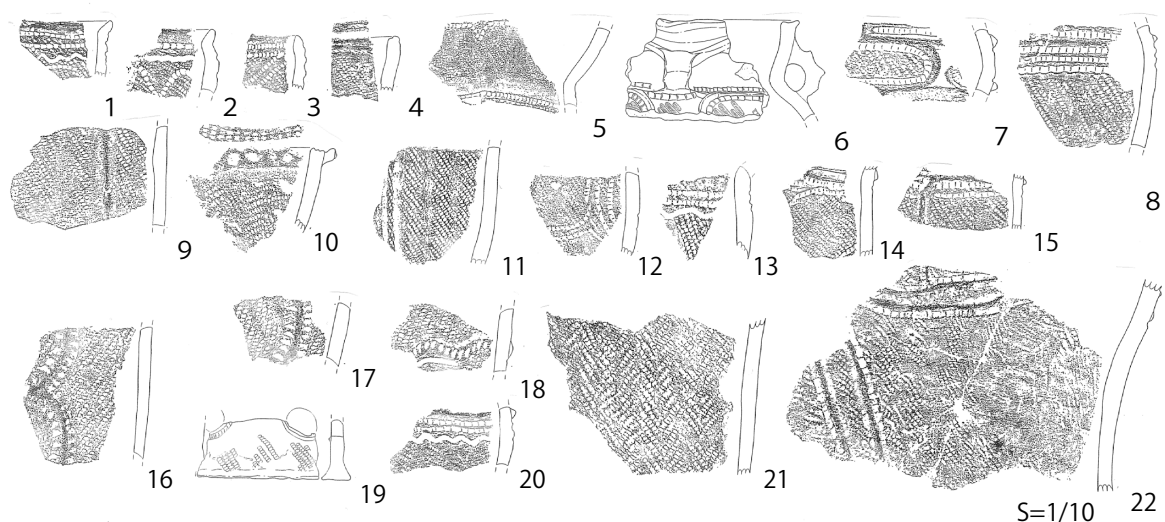
挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体・施文方向等	実見
6	1	SK136	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	
6	2	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	3	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	4	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	5	SK159	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	6	SK545	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	1段Lの縦回転施文	
6	7	SK545	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	8	SK545	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	9	SK545	縄文地に垂下隆帯	阿玉台Ⅱ式	2段LRの縦回転施文	○
6	10	SK208	隆帯押捺型	阿玉台Ⅲ式古	2段LRとRLを交互に縦回線施文	○
6	11	SK436	縄文地に垂下隆帯	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	12	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	13	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	14	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	15	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文	○
6	16	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	3段RLRの縦回転施文（極太の粗い繊維による2段RLの可能性あり）	○
6	17	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	16と同じ（同一個体）	○
6	18	SK436	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式新	3段RLRの縦回転施文	○
6	19	SK436	七郎内Ⅱ群土器 （有孔脚部）	阿玉台Ⅲ式新	2段LRの縦回転施文（摩耗が激しく、観察困難）	○
6	20	SK533a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転施文（摩耗が激しく、観察困難）	○
6	21	SK533a	縄文のみの体部片	阿玉台Ⅲ式	2段LRとRLを交互に縦回線施文	○
6	22	SK533a	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ式	2段LRの縦回転施文（条の深浅差があり、直前段反燃りの可能性があるが、条の交差が確認できなかった。）	○

興事業団埋蔵文化財センターが、記録保存のための発掘調査を実施し、報告書が刊行されている(進藤1996)。

縄文時代早期中葉、前期中葉、中期前葉および平安時代初頭の集落跡で、縄文時代中期の袋状土坑 29 基と平安時代初頭の竪穴建物跡 3 棟と土坑 3 基を調査した。

阿玉台Ⅰb式古段階～阿玉台Ⅲ式古段階の良好な一括遺物に恵まれており、今回は第 2・5・11・14・21・25・26・31 号土坑出土土器を分析・観察する。

器形復原可能な土器と破片を合わせて 17 点を対象とした。2 段 LR の縄を縦回転施文したものが 15 点で、88.2%を占めた。他に 1 段 L の縄を縦回転施文したものが 1 点、前々段反燃り LRR の縄を縦回転施文したものが 1 点ある。時期(細別型式)別にみると、阿玉台Ⅰb式古段階は、2 点中 2 点が 2 段 LR の縄を縦回転施文したもの、阿玉台Ⅰb式新段階では、5 点中 4 点が 2 段 LR の縄を縦回転施文したもので、他 1 点が前々段反燃り LRR の縄を縦回転施文したものである。新古を分けて、阿玉台Ⅰb式期とすると、9 点中 8 点が 2 段 LR の縄を縦回転施文したもので、88.9%を占める。



1 : SK136 2～5 : SK159 6～9 : SK545 10 : SK208 11～19 : SK43 20～23 : SK533 a

第6図 三輪仲町遺跡 中期前葉縄文施文土器(2)

山苗代 A 遺跡では、中期前葉には、8割以上9割近くが、2段 LR の縄を縦回転施文しており、他に1段 L と前々段反撚り LRR を縦回転施文してものがある。

まとめ

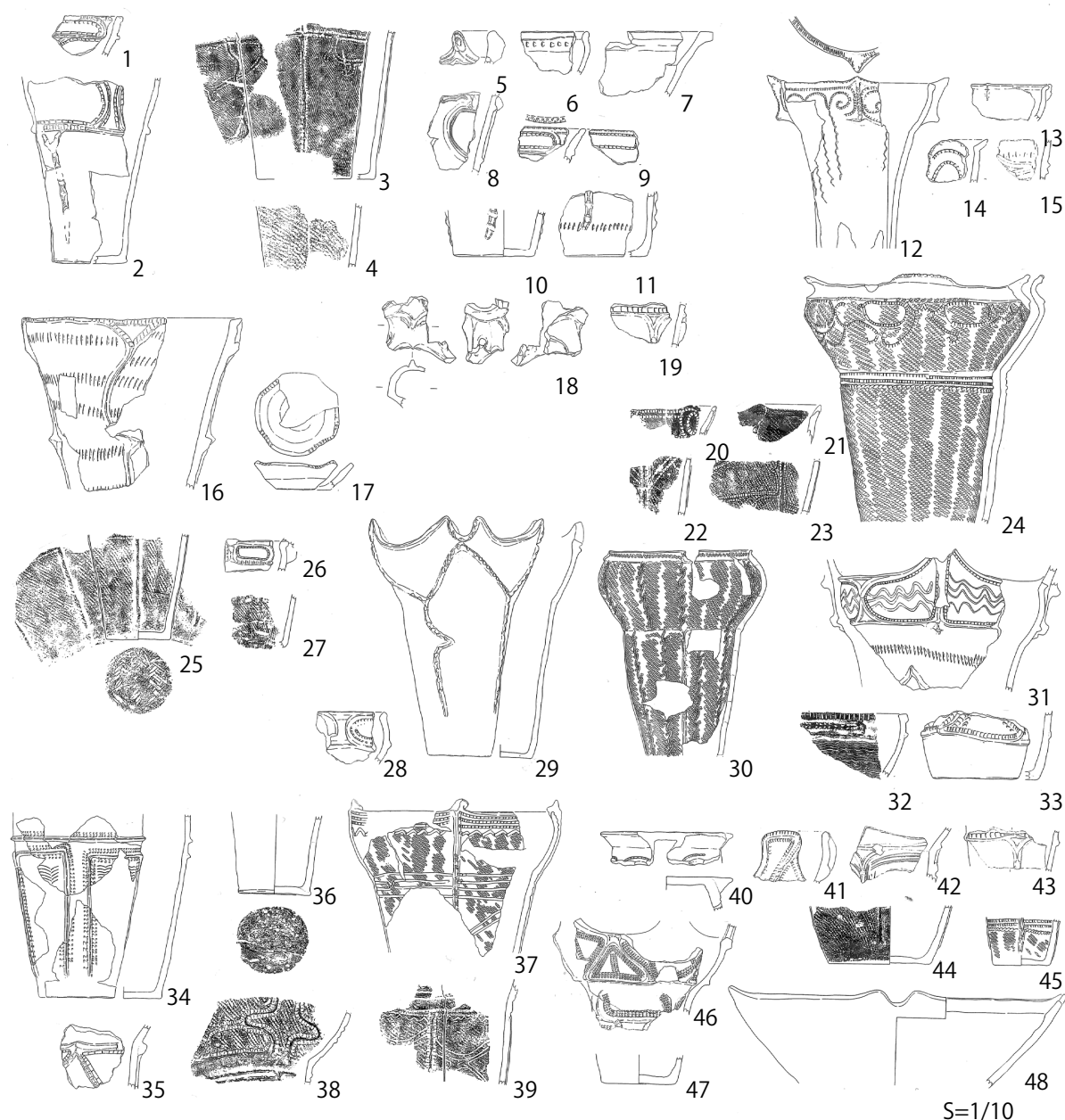
今回、栃木県北部の槻沢遺跡、三輪仲町遺跡、山苗代 A 遺跡の中期前葉(阿玉台 I b～Ⅲ式期)の大木式系土器および阿玉台式土器 78 点に施文された縄文を、分析・観察した。以前に分析した品川台遺跡と三輪仲町遺跡、山苗代 A 遺跡は似たような傾向が見られた。大木式系土器では8割以上が2段 LR の縄を縦回転施文したもので、これに2段 LR と RL を交互に縦回転施文した条が綾杉状のもの、2段 RL の縄を縦回転施文したもの、1段 L の縄を縦回転施文したものが伴う。また、3段の縄や前々段反撚りの縄を縦回転施文したものもあった。一方、槻沢遺跡 SK393 では、2段 LR の縄の縦回転施文による単節斜縄文の比率が、50%以下と少ない。筆者が茨城県北部で注目した、直前段反撚りの縄による条が不揃いな縄文は、槻沢遺跡 SK393 で1～2例確認されたにすぎず、他の3遺跡では確認できず、低調であることがわかった。

【註】

註1 堀越正行は、阿玉台式の縄文受容にあたっては、大木式の LR ではなく、敢えてそれと反する RL としたという、重要な指摘を行っている。

【参考文献】

- 海老原郁雄,1980,『栃木県埋蔵文化財調査報告第34集 槻沢(つきのきざわ)遺跡—栃木県那須郡西那須野町—』栃木県教育委員会
- 後藤信祐,1996,『栃木県埋蔵文化財調査報告第171集 槻沢遺跡Ⅲ 県営圃場整備事業「井口・槻沢地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会
- 進藤敏雄,1996,『栃木県埋蔵文化財調査報告第177集 小丸山古墳群 山苗代 A・C 遺跡 矢板市矢板南地区工業用地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会



1～4：第2号土坑 5～11：第11号土坑 12～15：第21号土坑 16～24：第5号土坑
25～27：第26号土坑 28～30：第31号土坑 31～39：第25号土坑 40～48：第14号土坑

第7図 山苗代A遺跡 中期前葉 一括遺物

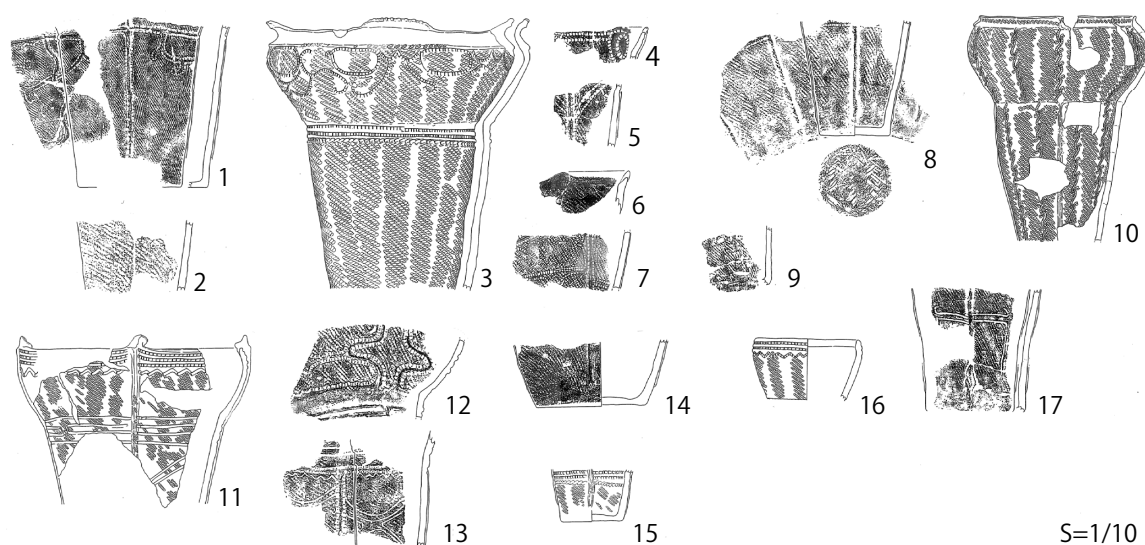
塚原孝一,1994,『栃木県埋蔵文化財調査報告第143集 三輪仲町遺跡 一般国道293号の道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会

塚本師也,1992,『栃木県埋蔵文化財調査報告第128集 品川台遺跡 品川代行業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査』栃木県教育委員会

塚本師也,2013,「第10回 阿玉台式土器の細分(4)」『アルカ通信』NO.122,考古学研究所(株)アルカ

塚本師也,2019,「栃木県北部における縄文時代中期前～中葉の土器編年」『研究紀要』第27号,公益財団法人とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター

堀越正行,2008,『千葉の貝塚に学ぶ』



第8図 山苗代A遺跡 縄文施文土器

第4表 山苗代A遺跡出土土器 縄文施文観察表

挿図	番号	出土場所	土器の型式・類別	時期	施文原体・施文方向等	実見
8	1	第2号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb古	2段LRの縦回線施文	
8	2	第2号土坑	縄文施文体部	阿玉台Ⅰb古	2段LRの縦回線施文（硬く粗い繊維を撚っているため、節が不明瞭。1段Lの可能性あり。）	○
8	3	第5号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb新	前々段反撚りLRRの縦回転施文	○
8	4	第5号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb新	2段LRの縦回転施文	○
8	5	第5号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb新	2段LRの縦回転施文	○
8	6	第5号土坑	全面縄文	阿玉台Ⅰb新	2段LRの縦回転施文	○
8	7	第5号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb新	2段LRの縦回転施文	○
8	8	第26号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb	2段LRの縦回転間隔施文	○
8	9	第26号土坑	縄文施文体部	阿玉台Ⅰb	2段LRの縦回転施文	
8	10	第31号土坑	原体圧痕	阿玉台Ⅱ	2段LRの縦回転間隔施文	○
8	11	第25号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb～Ⅱ	2段LRの縦回転施文	○
8	12	第25号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb～Ⅱ	2段LRの縦回転施文	○
8	13	第25号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅰb～Ⅱ	1段Lの縦回転施文（硬く粗い繊維で撚ってあるため、節が不明瞭。2段LRの可能性あり。）	○
8	14	第14号土坑	縄文地縦位隆帯	阿玉台Ⅲ古	2段LRの縦回転施文	○
8	15	第14号土坑	七郎内Ⅱ群土器	阿玉台Ⅲ古	2段LRの縦回転施文	○
8	16	第17号土坑	七郎内Ⅱ群土器	—	2段LRの縦回転間隔施文	
8	17	第17号土坑	七郎内Ⅱ群土器	—	2段LRの縦回転施文	○